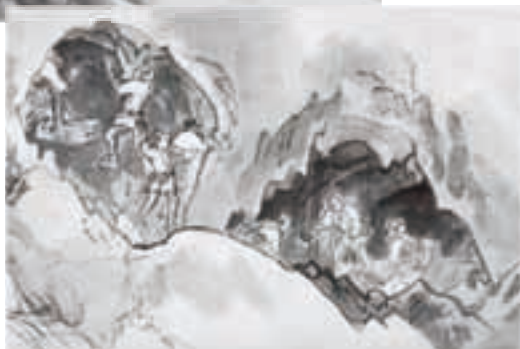


鴨東通信

夏

2013.7 No.90



●日常語のなかの歴史4
地獄

田村正彦

●てーたいむ

茶の湯の現場から問う「茶の湯全史」

熊倉功夫

●エッセイ

日本庭園逍遙

依田 徹

「兼六園」のイメージ

本康宏史

●台湾便り TSUJIMOTO@Taiwan-Univ. (最終回)

世界近代史の縮図のなかで——台湾大学での一年 辻本雅史

●史料探訪

豊竹山城少掾旧蔵書入れ本

『近世邦楽年表 義太夫節之部』

小島智章

御堂関白記全註釈

み どう かん ぱく き

全16冊

待望の
完結

山中裕編

道長の日記「御堂関白記」の原文・読み下しと詳細な註により
構成するシリーズ。

御堂御記抄／長徳4年～長保2年

寛弘元年〔復刻〕	二〇四頁／定価五、二五〇円
寛弘2年〔復刻〕	二八八頁／定価八、五〇五円
寛弘3年	二〇二頁／定価五、九八五円
寛弘4年	二二八頁／定価五、七七五円
寛弘5年	二二〇頁／定価五、七七五円
寛弘6年〔改訂版〕	一八〇頁／定価五、二五〇円
寛弘7年	一七〇頁／定価五、〇四〇円
寛弘8年	二二〇頁／定価五、七七五円
長和元年〔復刻〕	二五六頁／定価六、八二五円
長和2年〔復刻〕	三〇〇頁／定価八、八二〇円
長和4年	三九八頁／定価一一、六五五円
長和5年	二九〇頁／定価六、三〇〇円
寛仁元年〔復刻〕	四四二頁／定価一二、〇七五円
寛仁2年上〔復刻〕	二六八頁／定価七、八七五円
寛仁2年下／治安元年〔復刻〕	一九二頁／定価五、六七〇円
	一九八頁／定価五、七七五円

祝!!

ユネスコ世界記憶遺産
登録

二〇一五年の世界記憶遺産登録に向けて

日本政府による推薦が決定!

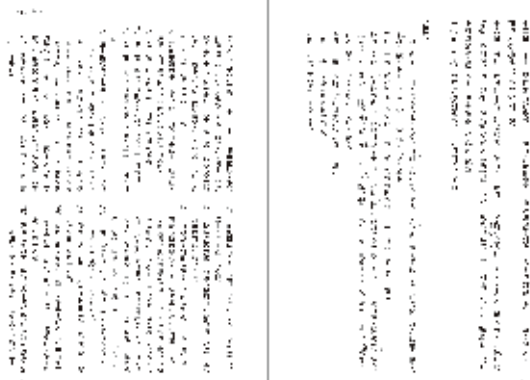
とう じ ひやく とう もん じよ
東寺百合文書

既刊10冊

京都府立総合資料館編

奈良時代から江戸時代初期まで約九百年にわたる日本最大の古文書群(国宝)『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。

▼A5判・平均四五〇頁／定価(各) 九、九七五円



本文組見本

じごく【地獄】

現在、どれほどの人が地獄の存在を信じているのかはわからないが、巷間には「地獄」という言葉があふれている。「生き地獄」「借金地獄」「受験地獄」「通勤地獄」、あるいは、「地獄の日々」「地獄を見る」「地獄絵図」など挙げていけばきりが無い。

これらの言葉が意味するのは、たとえば源信が『往生要集』で事細かに描いて見せた地獄の世界そのものではなく、言うなれば「比喩としての地獄」ということになる。それは悲惨な体験や光景を地獄のそれに喩えて表現するものであり、現代の「地獄」の多くはそのような意味で使われているのである。

では、このような形で「地獄」を比喩と

して用いるようになったのは、いつの頃からであったのだろうか。管見に入る限り、最も古いのは『方丈記』の「彼の地獄の業の風なりとも、かばかりにこそはと覚ゆる」という一節であろう。京都を見舞った五大災厄のうち、治承四年（一一八〇）四月二十九日に起こった辻風についての記述で

ある。

また、同時期に勃発した治承寿永の内乱も、『平家物語』

では「おめきさげぶ声、焦熱、大焦熱、無間阿毘のものを底の罪人も、これにはすぎじとぞみえし」と語られている。

これは南都焼き討ちで逃げまどう人々の姿を描写したもので

あるが、同様の記述は壇ノ浦で安德天皇が入水する場面にも見られる。どちらもそれまでの常識では考えられない悲惨な光景であり、それを記す手段として「地獄」が用いられているのである。

日常語の歴史 なかの歴史 4

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

う過酷な経験が、「地獄」という言葉の意味を大きく変えてしまった。

翻って、ほんの数年前に未曾有の震災を経験した我々にとっても、それは遠い過去の話ではないはずである。

（田村正彦・大東文化大学非常勤講師）

幅広い学問領域にまたがる茶の湯研究

——今回刊行を開始した『講座 日本茶の湯全史』

（全三巻）は、茶の湯文化学会二〇周年記念出版です。先生は茶の湯文化学会の設立に事務局として尽力され、本年四代目の会長に就任されました。また本書の編集委員会の代表として、企画・編集に指導的役割を果たされました。

茶の湯文化学会の設立にあたっては「茶道」という、流派の茶の湯をイメージする言葉から離れて、もう少し自由にお茶というものを広く考えようということから、「茶の湯」という言葉をあえて使いました。また、文化という言葉をなぜつけたかと言いますと、茶の湯の周辺には非常に学際的ないろいろな世界があり、その学際的な研究が大事だということなのです。当然その中に建築・宗教・文学・絵画・工芸、あるいは庭園や芸能など多様な研究領域・研究者が入ってこなければいけません。さらにはその周辺にももっと広い領域があります。たとえば比較喫茶学のような、世界で茶というのはどういうふうに飲まれているのか、あるいは茶という植物はどういう性格の植物か、そのルーツはどこか、どのように伝播してきたのか、茶の医

ていーたいむ

茶の湯の現場から問う「茶の湯全史」

くま くら いさ お
熊倉功夫

（静岡文化芸術大学学長・茶の湯文化学会会長）

薬の機能はどのようなかというような、植物学的・育種学的な研究や科学的研究、さらに人類学、またその比較文化的な検討や農業・流通・経済・経営学的な考察が必要なのですね。

茶の博物館構想

そういうことに私が気づかされた契機は、いろいろありますが、一つは、茶の木の伝播を調べた松下智さとし先生の研究です。また、当時斬新な文化論として出てきた照葉樹林文化論など、人類学や生態学などの学問領域にも刺激を受けました。

そうこうしているうちに、松下先生が、昭和四六、七年ごろ、当時京都大学人文科学研究所の教授であった梅棹忠夫先生のところを訪れたのです。そのころは国立民族学博物館は構想段階でまだ出来ておりませんでした。が、松下先生は「茶の湯や煎茶を含みこんだ、世界的なお茶と人類とのかかわりを示し、実際に体験できるような博物館を作りたい」と相談されたのです。梅棹先生は、自分はお茶の専門ではないかと、同じく京大人文研教授であった林屋辰三はやしや たつぎぶ郎先生を紹介したのです。

林屋先生は、以前から煎茶に非常に関心を持たれており、松下先生の構想に賛成されましたが、先生も忙しいからということで、林屋先生の下で助手として働き始めた私を紹介したわけです。私も松下先生の本は読んでいましたが、博物館はすぐできるものではありませんから、さしあたって研究会を始めましょうということ、茶の文化研究会を昭和四七年に始めました。

その会は、京都の若い研究者が集まってきて楽しい会になり、非常に盛りあがりました。一般市民の方も多かったのですが、茶業の研究者や、松下先生の関係で名古屋大学の農学部出身の方々、守屋穀さんの関係で民博関係の人も入ってきました。また、昭和四四年から始まって今も続いている、茶書を精読する研究会である木芽文庫のメンバーも合流して、三、四〇人いつも集まるような研究会になりました。

茶の湯文化学会の発足

そういう中で、茶の湯に関する学会を作ろうじゃないかと考えて、昭和四七、八年に、木芽文庫のメンバーを中心に、名簿から何からいろいろ用意して、趣意書を書いたりしたのですが、結局当時の私達にはそれだけの力がなく、その計画は立ち消えになりました。まだ私達が二〇代の終わりから三〇代の初めで、家元に直接話ができる立場でもなかったのです。

それが平成に入って、茶の湯の世界もずいぶん変わってきました。それは諸先輩の大変な成果だと思いますが、茶の湯研究はや

はり必要だという認識が家元や茶人の方の中にも定着してきました。また、私たちもだんだん信用を得る立場になってきて、中村昌生、林屋晴三、村井康彦、倉澤行洋の各先生方を中心に、筒井紘一さんや赤沼多佳さんなどと共に、学会設立がそろそろ実現できるころだろうということになりました。それで林屋辰三郎先生はじめ大先生方に顧問になっていただいて、平成五年に茶の湯文化学会が京都で発足したのです。

茶の湯に沿った研究

学会発足までに長い前史があったわけですが、昭和三〇年代に私たちの先生方の仕事が出揃います。淡交社から出た林屋辰三郎先生の『図録茶道史』（全二冊、昭和三七・三九年）、その詳細な図版解説を書いたのが村井康彦先生。それから芳賀幸四郎先生の『千利休』（吉川弘文館人物叢書、三八年）、桑田忠親先生の『利休の書簡』（河原書店、三六年）、西山松之助先生の『家元の研究』（校倉書房、三四年）などです。また角川書店の『図説茶道大系』（全七冊、三八―四〇年）がべらぼうに売れました。茶の湯が大衆化して一気に茶道人口が伸びた時代でした。当時の新しい茶の湯の担い手である女性達は、非常に知的な意欲の高い人達でした。

それが一段落して私達の世代になったときに考えたことは、今までの茶の湯研究は素晴しいが、実は茶の湯研究を専門にしている先生はいないじゃないかということなのです。従来の茶の湯研究者は、茶の湯の研究が目的ではなくて、自分の本来の研究

テーマの中に茶の湯を組み込むことで自分の研究テーマを豊かにし、独自性を持たせていたのです。言いかえると、現実の茶の湯がどうであろうと、自分の研究の中に茶の湯が取り込めればいいわけであって、現実の茶の湯に対してはかわりたくない、あるいはその必要がないということなのです。

茶人の方も先生方にかかわってもらう必要はなかったのです。

ただ掛け軸が読めないとか、茶室についていろいろ相談したいというときには専門の先生が必要になります。しかしその先生方に、茶の湯について何か発言してくれということを求めているわけではありません。お互い棲み分けることで、安定した関係が出来あがっていたわけです。

それに対して学会創立メンバーの多くは、それでいいのだろうかと、もともと茶の湯に深くかかわるべきではないかということを考えました。林屋辰三郎先生は、家元に対して一定の距離を保つことが必要だと、よく仰っていました。あまり茶の湯・家元の中に深く入ってしまうとよくないから気をつけなさい、という言い方をされましたね。

しかし私はそうは思いませんでした。むしろ家元と共に、今茶の湯はどういうふうな機能し、これからどのように展開していくのかということと一緒に考えられるような、茶の湯に沿って自分たちの研究を展開させたいというのが、私達の若いころの願いでした。茶の湯の現場に自分たちも入りたい、できればお茶を点でたいと。ですから私達は茶の湯の稽古もしました。久田宗也先生

や戸田勝久先生といった、茶の湯そのものを実践する先輩達もいらっしやったし、我々の仲間では一番そういうことを徹底したのは筒井紘一さんですよ。茶の湯に対して学問という対抗軸を持ちつつ、それに沿って研究をしていくということが、『講座 日本茶の湯全史』の大きなテーマなのです。

主體的に茶の湯に立ち向かう

今茶の湯は大変厳しい時代にあると思うのです。茶の湯研究をどう考えるかというのは、現在の茶の湯をどう考えるかということなのです。その時には、空理空論ではなくて、歴史から学ぶということが大事です。歴史上では、ものすごく多様な茶の湯が試みられてきているわけで、そのさまざまな茶の湯の試みの中に、今そして未来の茶の湯のあり方を考えるヒントがあるのです。

茶の湯文化学会というのはそういう意味で言うとは非常に実践的な学会で、純粹に学問的なことを求めている人から見ると批判対象になります。今でも印象に残っていますが、学会の初期の頃に、林屋晴三先生が利休の茶の湯という講演をしました。その時に「利休さん」という呼び方を連発したのです。それを聞いた著名な美術史家の先生が、ああいう態度では研究にならない、客観性と主観性を混同してはいけないと言いました。従前の学問としてはその通りですが、私達はむしろ主體的にこの茶の湯に向かうとしていくわけです。主體的であるということは、自分自身が茶の湯にどう立ち向かうかという主観の表現なのです。

客観性とは何かということが今問題になっています。歴史学では、虚心に確かな一次史料を読みこむことを第一義としました。しかし史料を読むという行為そのものに、すでにその人間の読み方というものすごいバイアスがかかってくるわけです。それを全部排除して客観的に史実を描くなんていうことは出来るはずがないのです。むしろ逆に歴史研究者は自分の問題意識をはっきり認識して、こういう問題意識であるから自分はこの史料をこういうふうを読むのだという、自分と史料との関係性を露わに告白すべきです。あたかもそういう関係がないが如く叙述してきた従来の歴史学というのは実にあやふやなのです。

茶の湯文化学会の会員には、研究など関係ない茶の湯の実践者が沢山いますが、それでいいのです。彼ら・彼女らが一体何を学問として期待しているのか、何を自分たちの問題として解決を求めているのか。そういうことを受止め考えなければいけません。

しかし最近では、若い研究者がふたたび学問の中に入り込みつつあります。私達は積極的に茶の現場に入れてもらってきたし、また茶の現場に誘ってくれる人たちがたくさんいたのです。今の若い人たちは、大寄せの茶会には行くでしょうが、茶事やお茶の先生と実際に懇談するというような機会が果たしてどれだけあるか、それがちょっと心配なのです。実



際にお茶をやるということが大事なのです。これからの若い人もっと、茶の実際を知ってほしいと思います。

近代が充実した初の茶の湯通史

今まで茶の湯の通史は実は書かれていないのです。もちろんお茶の歴史の本はたくさんあります。しかし従来の日本の茶の湯の歴史は利休中心であって、せいぜい宗旦・遠州で、近世は松平不昧と井伊直弼を書いて、近代は岡倉天心で終わ리というものでした。本書の画期的なところは、利休以後を重視していることです。利休さんを含めた第一巻。近世が第二、近代が第三巻と、利休以後が二冊になっていて、従来の茶道史の通念を破っています。

なぜそうなのかというと、我々はさまざまの茶の湯のあり方を、むしろ我々の足下に近いところできちんと見直していきたいからです。近代が我々にとって一番身近な時代なわけで、その一番身近な時代をしつかり見つめ直すことが、今自分どこに立っているのかということを知る上で非常に大事なことです。この『講座 日本茶の湯全史』は、今我々が享受している茶の湯がどうして今日こういうかたちになったのかを考え、未来を考える素材となるもののなのです。

(二〇一三・六・一八 於…表千家北山会館)

日本庭園逍遙

依田徹

大学に入り、日本美術史を専門的に学びはじめてから、一六年になる。この間、寺院を訪れて仏像や襖絵を見た回数は、とても数え切れない。しかし寺院を拝観しながらも、その庭園を真面目に鑑賞してはこなかった。恥ずかしながら、絵画や彫刻ばかりを美術品と思いこんできたためである。建築には関心を向けても、空間的に連続している庭園は無視してもよい、そんな思いこみもあつたような気がする。

そんな私が庭園に関心を持つようになったのは、二年前のことである。茶の湯に関係する共同研究で、庭園史の研究者と御一緒したのがきっかけであつた。私が研究している近代の茶人達（特に「近代数寄者」と呼ばれる）が多くの庭園を作っている中、その庭園の知識が不十分であることに恥入つたのである。以来、機会を作つてはカメラを片手に、各地の庭園を歩きまわってきた。

日本美術史で庭園というと、大徳寺大仙院や桂離宮ばかりが取り上げられるが、まだまだ関心の幅が狭いように感じる。改めて日本美術史の視点から考えてみると、室町時代の山水画は、同時代の庭園と結び付いているはずである。特に京都の等持院の庭園

を拝観した折に、室町の美意識が瑞々しく残されていることに感激した。幾度となく京都を訪れながら、何とはなしに拝観を避けていたのが鹿苑寺金閣である。室町時代の庭園を見るために初めて訪れてみると、その庭園の壮大さ、そして有名な鯉魚石の見事に心を打たれた。

郷里の山梨県に、優れた庭園が多く残されていることも気付かされたのは、嬉しい収穫であつた。夢窓疎石の作つた塩山の恵林寺庭園が有名であるが、それだけではない。とりわけ甲府の東光寺庭園は蘭溪道隆の作庭と伝えられており、その伝承に恥じない、見事な中世庭園である。

平安時代の庭園については、平等院以外については、本当に無知であつた。法金剛院の「青女の滝」をはじめ、大覚寺の大沢池、勧修寺などに遺構が遺されていることは、良い勉強となつた。平泉の庭園を見なおすために、十年ぶりに毛越寺を訪問したもの、有名な南東の立石が修復工事中であつたのが残念至極であつた。

また桃山時代の障壁画は、庭園と空間的に連続しており、併せ

て鑑賞されていたものである。京都の智積院は、長谷川等伯の襖絵で有名である。しかしこの襖絵を何度も見ていても、これと向かい合う庭園に関心を向けてこなかったのは、文字通り不覚であった。特に驚かされたのが、醍醐寺三宝院と、高台寺圓徳院という、豊臣秀吉ゆかりの寺院の庭園である。秀吉の絶大な権力で集められた石は、一つ一つが見事であり、まさに桃山の空気を漂わせている。

江戸という都市を想像するには、大名庭園の知識が不可欠である。現在の都心部に立ち並んでいた各大家の屋敷には、それぞれ広大な庭園が築かれていた。将軍が大名邸を訪問する「御成」の際には、この大名庭園が様々な演出の舞台となる。残念ながら、明治維新以降の東京の都市化によって、江戸の名園の多くは失われてしまっている。関東大震災の際にも、名園の誉れが高かった平戸藩松浦家の「蓬萊園」が被災し、取り潰されてしまった。幾多の危機を乗り越えて遺されてきた浜離宮、後楽園、六義園といった名園が、江戸の大名庭園の壮大さを伝えている。この他にも、東京大学の三郎池などは、その視線で見ると加賀藩前田家の庭園の痕跡が遺されていることに気づかされる。

一般に、庭園の見ごろは桜や紅葉の時期と思われるが、私の場合には石組の造形美により大きな魅力を感じる。高台寺圓徳院を拝観した折には、石を見たいのであれば、冬場の落葉した時期が見ごろだと教えられた。なるほど、その通りである。また晴れた日ばかりが良いとは限らない、雨に濡れた石は、趣深い情感を

漂わせるものである。

こうした古い庭園が、大切に遺されてきたのは素晴らしいことである。また埋もれていた庭園が、専門家たちによって復元される場合もある。昨年は、群馬県甘楽町の「楽山園」が復元された。これは織田信長の次男、織田信雄の作と伝えられる寛永期の大名庭園である。

しかし各地の庭園を廻っていると、手入れが行き届かず、荒れている庭を見ることも多い。中でも残念なのは、伸びきってしまった植栽が、滝や石組といった庭園の見どころを、覆い隠してしまっているケースである。庭園を保存するためには、単に剪定をするだけでなく、その庭の構成を踏まえた上で樹木の姿形を維持する必要がある。これは指示を出す管理者の、見識が問われる部分である。

調査でおもむいた寺院で、目当ての庭園が改作されてしまった後であったという経験もあった。これは近代のある茶人の作った庭であったが、作庭者の名前が知られていなかったために、史跡としての重要性が認知されていなかったことが一因だろう。近代の造園家としては、小川治兵衛が有名であるが、この他の造園家についても顕彰が進むことが待たれる。文化財としての近代庭園への関心が、今以上に高まっていくことを期待したい。

(元さいたま市大宮盆栽美術館学芸員)

「兼六園」のイメージ

「歴史都市」と目されている都市が、全国にいくつもある。京都、奈良はその代表格であり、鎌倉、彦根、姫路、熊本なども含まれるだろう。とはいえ、これらの「歴史都市」の実態は、近代（現代）的な市街に残された建造物や景観など、「歴史」を想起させる諸要素に、その都市の物語が組み合わさったイメージ、いわば、近代における「前近代の都市記憶」なのではないだろうか。こうした認識が、今度刊行される論集『近代日本の歴史都市』のモチーフのひとつである。

なかでも「歴史都市」の多くを占める旧城下町においては、城郭（とくに「聳える天守閣」）が格好のシンボルたりえ、これに付随する「大名庭園」がその役割を果たしている場合も少なくない。後者では、たとえば後楽園の岡山や栗林公園の高松などがまぎれもない。特別名勝「兼六園」を擁する「加賀百万石」の城下町金沢は、その筆頭ともいえよう。

ところで、「歴史都市」が近代の産物とすれば、そのシンボルたる「大名庭園」も、しばしば維新以降の歴史的变化を経ているとみなくてはならない。ここでは、兼六園が、その実態もさるこ

もと
やす
ひろ
し
本
康
宏
史

とながら、むしろイメージの面でも卓越した「名園」であることを紹介したい。

まず、兼六園といえば、「日本三名園」のひとつとして、岡山後楽園、水戸偕楽園と並び称せられる名勝とされる。しかし、明治（大正期）の庭園史家小澤圭次郎が、『明治庭園記』のなかで記すように、その始まりは「日本三公園」を印象づけたキャンペーンによるものであった。すなわち、明治一八年（一八八五）、岡山後楽園に明治天皇の行幸があり、各新聞が競って天皇の称賛ぶりをとりあげ、これを契機に「後楽公園」の名が知れわたり、その後、「兼六公園」などを加えた「三公園」が喧伝されたというのである。詳細は省くが、地方の大名庭園が、維新以降、自由な見物の対象として開放されたことを前提として、他と比較しうる「日本三公園」の冠称が誕生。国定教科書への掲載をもって定着し、しだいに「日本三名園」として人々に受け入れられるようになったのである。

一方、兼六園のイメージといえば、片足を池の縁石にかけた「微軫（こしん）（琴柱）灯籠」が、その絶妙なデザイン性もあって、今日、

兼六園のみならず金沢のシンボルの存在となっている（イルクー
ツク・全州など、姉妹都市にも微軫灯籠が贈呈されている）。し
かし、少なくとも明治期の兼六公園を代表する景観は、この「微
軫灯籠・霞ヶ池の景」ではなく、雁行橋近くの「大桜の景」なの
であった。

たとえば、明治三十三年（一九〇〇）の「金沢名所」（刷物）には、
その一枚としてもちろん「兼六公園」が選ばれているが、描かれ
た風景は件の「大桜」であった。同三五年の「金沢繁昌壽娛六」（双
六）の「上がり」も、同じく「大桜」。これよりさき、明治二七
年刊の小川孜成著『兼六公園誌』などは、挿入見取り図内に「大
桜」はイラスト入りだが、「微軫灯籠」は表示すらない。つまり、
明治期の金沢では、「旭桜」とも称したこの大桜が、公園のシン
ボルとして親しまれていたのである。

ちなみに、この大樹は、樹齢五百年の山桜で、もとは加賀八家
（藩老）の村井邸にあったものを藩主に献上したもの。春、花を
つけた光景は実に見事であり、園内随一の名所とされた。ところが、
昭和初期に衰退枯死してしまい、代わりに「兼六園のシンボル」
の座に躍り出たのが、微軫灯籠だったのである。

さらに、そもそも「兼六園」という名称自体が、この庭の「大
名庭園」イメージを高めてきたこともよく知られる。というのも、
この風雅な庭園名は、前老中松平定信が、加賀藩主前田斉広の懇
請に応じ命名したもの（出典は、北宋の詩人李格非『洛陽名園記』
の「園甫の勝、よく兼ね能ざるもの六あり」）。楽翁とも号した稀

代の文化大名が、その古典的教養を披歴して「加賀百万石」の大
大名に与えたオマージュと伝えられてきた。しかし、ごく最近、
当の定信自筆の日記の記述から、彼自身は、「兼六園」の名前や
その由来すら知らなかったことが明らかにになった。天理図書館所
蔵「花月日記」文政五年九月二〇日の条には、「加賀の太守より
額字をこふ。（略）兼六と、はいかゞと、とひにやりぬ。のちに聞
けバ撰家のうちより名付けて、誰やらの文中、園を設くるに得
がたきもの六あり、その六を兼しといふ心ばえなり」とあり、実
は京都の公家が名付け親だったのである（『北國新聞』平成二四
年一月二九日付記事参照）。これも、「大名庭園」＝文化大名に
よる命名、とのイメージを、後年補強したものと推察される。

こうしてみると、名園「兼六園」は、実に見事な「近代の記憶」
によって彩られてきたことがうかがえよう。いうまでもないが、
このことは、兼六園の庭園としての価値を疑うものでは決してな
い。むしろ、「大名庭園」の近代史が、兼六園にみられるように、
さまざまな歴史的背景とイメージによって、いかに豊かな綾を織
りなしてきたかを詳かにしているのである。ことほどさように、
「歴史都市」は、まさにその「歴史的な記憶」を読み取る格好の
素材といえよう。
（金沢星稜大学教授）

4 世界近代史の縮図のなかで ——台湾大学での一年——

辻本雅史

昨年九月に始まった台湾大学（以下「台大」）の授業も、六月下旬に学年末を迎えた。年間通して一通り経験してきたことになる。折々の体験を報告して連載を終えたい。

国際シンポジウム・研究費・ペーパーレス

まずは国際シンポジウムが多かった。昨年九月からこの六月までに、私が関わった国際シンポは七回に及ぶ。うち企画主催三回、基調講演三回（二回は台湾大学外）、コメント発表二回。主催は人文社会高等研究院執行メンバーの一人としての仕事である。いずれにしろ研究拠点としての台大の役割を体感した。間もなく文学院付属「日本研究中心」が発足する。本センターには、台大において立ち遅れていた日本研究の、拠点化事業の加速化が期待されている。

研究重視型の台大では、教員の研究評価には日本より厳格な基準がある。なかでも研究費獲得は評価の重要な要素。教員個人に校費の研究費配分はない。よって競争的資金を取り

に行くしかない。学内校費にも一定の競争枠があり、私は文学院の共同研究プロジェクトに加わり、若干の研究費の配分を受けている。しかし自分の研究のためには外部資金の獲得が必要。一般には行政院国家科学委員会（国科会）へ研究費を申請する。それは、日本学術振興会の科研費とほぼ同様の仕組みの、国家の競争的資金である。締切りの一二月末は、申請書づくりでどこでも教員は大わらわ。私も周囲の助力を得て何とか申請できた。幸いにも、昨年度から日本語での申請も認められている。英語でももちろんOK。申請作業はすべてウェブ処理で、紙媒体は使わない。書類の様式などは日本の科研と大きくは変わらない。ただ過去五年の業績は、リスト一覧に加えて、PDF化したその業績（著書・論文）本文をウェブに載せる必要がある。審査には業績「現物」が不可欠とされているからである。ちなみに応募者はその後適宜業績を追加登録できるらしい。

国科会もそうであった通り、ここではペーパーレス化が徹

底している。紙媒体文書は原則としてない。教務事項や公費管理、給与・税務等の庶務的事項もほとんどウエップで自ら処理しなければならない。授業の教材配布、学生の提出物等も授業「掲示板」のようなどこでもやり取りできる。もっとも私は活用しきれていないが。各種お知らせメールが、毎日幾通も届く。所属部局はもちろん、大学本部からのメールも毎日来るし、節目ごとに学長からのメッセージも届く。そのためか、キャンパス内どこでも無線ランが張り巡らされ、大半の学生がタブレットやノートPCを持ち歩いている。

豊かな自然

台大の豊かな自然風景は特筆される。二月中旬に春節（旧



醉月湖

正月）の休みが明けて二学期が始まる。ひと月ぶりのキャンパス、色彩を増した花が確かな春の訪れを告げている。そして三月に台大名物の杜鵑花祭がある。大王椰子がそびえる椰林大道の足下には丈の低いつつじが並んでいて、三月一斉に花開く。一株に三色の花を

つける有名なものもある。中旬の週末二日間が杜鵑花祭。日本の大学祭とオープンキャンパスを併せたような全学の催し。台湾各地から高校生が集団で来校し、五〇余の学系の学生による説明を順に受け、賑やかなパフォーマンスやテント出店を愉しむ。市民にも開放され、さすがの広いキャンパスも人で埋まる。

広大な台大キャンパスには、熱帯・亜熱帯の巨樹・古木が、道路や学舎を取り巻くように配され、たいてい四―五階層の建物より高い。こうした木々は長く暑い夏に欠かせない木陰を成している。その一本一本が樹名入りの登録番号札によって管理されている。農葉散布や芝の刈り込みなど、環境維持への努力も怠らない。

巨樹を棲処とするリスには毎日のようにお目にかかり、種々の小鳥のさえずりも絶え間ない。醉月湖の名のある大きな池には亀やコイ、家禽類が飼われ、それに臨む巨樹の森では気功や散歩の市民が見られる。周辺の喧騒とは別世界の構内は、さながら市民も憩う公園としても機能している。

台大の本部キャンパス面積は二四haだが、各地の校地を併せると台湾総面積のなんと一%を占めるという。ただし中央山岳地の演習林や農場が広大であるらしい。キャンパスでは、結婚の前撮り写真撮影のカップルやグラビア用のロケ隊を頻繁に見かける。整備された豊かな植生と学府としての文化的歴史



日文学系卒業生と主任教授(中央)

的建築群が、格好のロケーションなのであろう。

広いキャンパス、私も含め、多くの学生たちの移動の足は自転車であり、その風景は京大と変わらない。ただ自転車は駐輪場に整然と並び、交通の障害になることはない。この点は某大

学と大違いで、そのマナーに感心。しかしこんな経験をした。ある日、駐輪の余地がない。すぐに戻るからと、所定スペースを1mほど外れた車列の続きに止めた。五分後、私の自転車がない。周辺にも見つからない。ようやく近くの不法自転車撤去作業中の大型トラックの荷台にわが自転車を見出し、謝って回収できた。要はエリア外の「不法」自転車は容赦なく撤去という実力行使が、「学生のマナー」を支えていたのである。

卒業式

六月一五日土曜日、博士・修士・学士合同の卒業式があった。まず学長を先頭に卒業生たちが校内のメイン道路を、隊列を成して練り歩く(任意参加)。サウナに覆われたような暑い日、黒のガウンに角帽姿の卒業生の行列を、家族らが祝

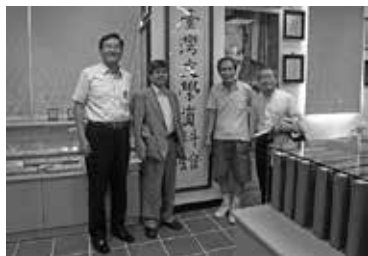
う。さながら祭りのような賑わいである。その流れで会場のドーム型体育館に入り、開式。数千人を収容できる三方のスタンドは家族で埋め尽くされている。祖父母らしき顔も。館内の床は真っ赤なカーペット、ステージは色とりどりの生花とピンク基調の装飾があふれている。厳粛を旨とする日本よりカラフルで明るい。ガウンの襟の色で所属学部が分かる。

式次第は日本と大きくは変わらないが、肩まで下がる角帽の房を院長が右から左に移す儀礼が舞台右で行われ(博士全員、修士と学士は系代表)、その左で筒入り証書を手渡し握手する学長とツーショットの写真撮影。正面の大スクリーンにその場面が学生の名前入りで映し出される。二時間半の長丁場だが、笑いあり拍手ありの賑やかさ。

午後は系(学科)ごとの卒業式と謝恩会が学生主体で催され、軽食も出て手作り感満載であった。礼儀正しくかつ人懐っこい台大生たちに囲まれて、愉快なひと時を味わうことができた。ただ分かりにくいのは、卒業式が学期末試験の前に行われること。週明けに「卒業生」たちは試験を受けにくるし、卒業できない学生もあるというが、それはそれ、ということなのだろうか。

台湾文学資料館

台南の「台湾文学資料館」を訪問した。是非とも紹介して



左から徐興慶教授、筆者、張良澤
名誉館長、太田登教授

おきたい。それは田園風景広がる真理大学台南キャンパスにあった。作家の自筆原稿や書簡類で埋まった第一展示室（とくに鍾肇政の全書翰の緻密な整理に感銘）から第六展示室までの展示、数万冊の蔵書、写真、雑誌、新聞類も含め、台湾文学に関するあらゆる資料を所蔵する最大の資料館である。驚くべきことに、このすべてが七〇歳を超えた張良澤名誉館長おひとりによるコレクションである。張先生は筑波大学でも教鞭をとられた台湾文学研究の第一人者。無給の名誉館長として、一人の助手とともに今もこの資料館を守っておられる。台湾文学に憑かれた一人の研究者が、強い意志と信念で成しうる事業の大きさを眼前にして、肅然たる感動をおぼえた。真理大学台南キャンパスは近く閉鎖の予定と聞く。台湾文学の宝庫の行く末が案じられて

ならない。詳細はHPで。

[<http://www.twlr.net/>]

世界近代史の縮図

「日文習作Ⅲ」という日本語作文の添削授業を担当した。この作文は、台湾の学生たちが何を考えているのかを知るのに大いに役立った。日

本の若者と変わらない面ももちろん少なくないが、日本では考えられない台湾の深淵を垣間見る瞬間もあった。たとえば「台湾人のアイデンティティ」と題した作文。父方祖父は「中国人」を自認する「外省人」、祖母は閩南人系「本省人」で多くを語らない。母方は客家人で、植民地期の小学校で学んだ外祖父は中国語より日本語、台湾史中国史より日本史に通じ、日本に強い愛着を持つ。国民党独裁下の苦難を経験した外祖母は中国を強く拒絶する「台湾人」。子ども期からカナダに住む妹は「台湾系カナダ人」との自己認識に迷いはない。そうした中で「台湾人」とは何か、自らのアイデンティティをどう構築するか、それが私の課題と、この作文は結ばれる。私は胸が締め付けられる思いに駆られた。知識で知っていることと、こうした学生に出会うこととは、まったく別のことなのである。

台湾には世界近代史のあらゆる問題が凝縮している。今の世界を考える主題に事欠かないといってもよい。電車内は四言語で放送されるし、男子卒業生の多くは兵役に就く。日本では経験しえない多くの体験は、私に新たな発見をもたらすし、日本を外から見る目を覚ましてくれる。自分の今後の仕事にどう活かせるかは分からないが、こうした新鮮な発見が続く限り、今しばらくはこの地で微力を尽くしたい。

（国立台湾大学日本語文学系教授）

史料

探訪

(52)

とよたけやましろのしょうじょう
豊竹山城少掾旧蔵書入れ本

『近世邦楽年表 義太夫節之部』

小島智章
こじま とも あき

(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 助手)

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館(通称「演博」)は、昭和三年(一九二八)、坪内逍遙博士がその半生を傾注した「シエークスピア全集」全四十巻の翻訳が完成したのを記念して設立された日本唯一の演劇専門博物館である。古今東西のあらゆる演劇資料を収集して比較研究し、世界の演劇文化の発展に貢献するという逍遙の理想を実現すべく、八十年以上に亘って収集してきた資料は、博物館資料と古籍だけで十二万点に及び、現在では国内外の演劇・映像研究者が集う研究拠点として、広く海外にも知られている。

今回紹介する豊竹山城少掾旧蔵書入れ本『近世邦楽年表 義太夫節之部』(昭和二年、東京音楽学校編、六合館)は、近年発見され、演博へ収蔵された豊竹山城少掾関係資料群のなかの一つである。

豊竹山城少掾(二世豊竹古靱太夫。一八七八〜一九六七 東京浅草生)は、明治から昭和中期に活躍した文楽の太夫で、近現代の文楽史上もっとも重要な演者の一人に数えられる。原作(初演時刊行の正本)を重視し、義太夫節の規矩とされる「風」を遵守して、人形淨瑠璃の「古典化」を集大成した演者と目される一方で、作品を深く読み込むことによって生み出される理知的で端正な語りは

「近代的芸風」とも称され、後続の演者は勿論、研究者や批評家の淨瑠璃観や作品解釈の在り方にまで多大な影響を及ぼしている。

山城少掾はまた、戦前から人形淨瑠璃関係資料の蒐集家・研究家としても著名で、『近世邦楽年表 義太夫節之部』や朝日新聞社版『近松全集』(大正十四年〜昭和三年)など、多くの研究書、文楽関係書に資料を提供し、学術的研究の進展に大きく貢献している。個人コレクションとしては比類のない質と量を誇ったとみられる貴重な蔵書は、昭和二十年三月の大阪大空襲ですべて灰燼に帰し、爾来その全貌は不明であったが、近年発見された資料群により、山城少掾の「研究者」的側面を具体的に知る手掛かりが得られることとなった。

そもそも山城少掾と早稲田大学との関係は古く、大正期まで遡る。逍遙門下の淨瑠璃研究者で、劇評家として活躍したのち早大講師となった石割松太郎に対し、山城少掾が持てる知識と蔵書を惜しみなく提供して協力したことに始まる両者の関係は、石割門下の研究者で演博館員でもあった鴻池幸武、文楽の復興・普及に尽力した演博二代館長河竹繁俊らへと受け継がれ、山城少掾の現



豊竹山城少掾旧蔵『近世邦楽年表 義太夫節之部』

役引退まで続いている。演博には、山城少掾自ら持参して寄贈した槽下看板（一座の代表の名を記して劇場前に掲げる看板）や愛用の見台をはじめ、相三味線であった三世、四世鶴澤清六使用の三味線など、所縁の品が数多く収蔵されており、ここに新たな因縁の品々が加わったことになる。

新出資料群の主な内容は、戦前の山城少掾（古鞆太夫当時）の蔵書目録を書写したノートや、石割松太郎、鴻池幸武らとの学術的交流の様子が窺える書簡類を含む「鴻池幸武・武智鉄二関係資料」、そして今回紹介する『近世邦楽年表 義太夫節之部』をはじめとする山城少掾旧蔵の書籍類、文楽関係資料からなる「豊竹山城少掾旧蔵資料」である。

山城少掾旧蔵書入れ本『近世邦楽年表 義太夫節之部』冒頭（掲出写真部分）には、次のような識語がある。

乍残念昭和廿年三月十三日夜ヨリ十四日早朝二掛けテノ大阪初之空襲之時 古鞆太夫宅全焼にて義太夫二関スル文献何物モ不残 此本之○印ハ手元ニ有シ院本也 此本ニあらざる丸本沢山有シ 又 享保十八年ヨリ昭和之今日ニ至ル迄之 大昔ハ絵入之二枚番付 大阪ハ勿論 京 江戸 各地ニ至ル迄番付ヲ調置シガ皆々焼亡 残念々 其外名所図会全部 並ニ義太夫評判記数々 実ニ残念々

△此印ハ又番付ヲ集メ手元ニ蔵スル分

◎此印ハ戦災後又々集メ掛け手元ニ丸本アル分

この識語から分かるように、本資料には、戦後収集した番付・

浄瑠璃本のみならず、戦災で焼失した「手元二有シ院本」や番付、劇書類の情報も細かく書き入れられており、新出資料群に含まれる蔵書目録類と併せ、失われた幻のコレクションを知るための貴重な手掛かりとなる。演博に収蔵されている同書の石割松太郎旧蔵書入れ本と詳細に比較することで、二人の協力関係や共有した資料内容についても、より明らかに becoming であろう。

もう一つ注目される書入れは、演者の略歴や出演履歴、墓碑銘などの記録で、本文への書入れの他、最終頁には、「文楽座櫓下第一世は竹本長登太夫……」以下、「第十七世は現今 二代豊竹古靱太夫……」まで、代々の櫓下の略歴、任期などの情報が列記されている。戦前に、山城少掾を中心として、過去の演者の経歴や墓碑の調査が行われていたことは、文楽関係書や雑誌記事から窺い知ることができたが、本資料の書入れのような、浄瑠璃史全体に亘るまとまった記録の存在は聞かない。新出資料群に含まれる他の書入れ本・書簡類にも、過去の演者や同時代の演者の経歴に関する記述が多数あり、既存の事典類から洩れた演者名や、現在では判読困難になっている墓碑銘などの貴重な記録も見受けられる。失われた資料、記憶に基づく情報が含まれる書入れ内容の検討については、これからの課題であるが、これらの資料群が、今後の人形浄瑠璃研究にとって、また、豊竹山城少掾という人物とその芸をより深く理解するうえで、極めて重要な資料であることは確かである。

《参考文献》

- ・茶谷半次郎編『山城少掾聞書』（昭和二十四年、和敬書店）
- ・「山城少掾自伝」『日本の芸談 第三卷 能 狂言 文楽』（昭和五十三年、九藝出版）
- ・小島智章・児玉竜一・原田真澄「鴻池幸武宛て豊竹古靱太夫書簡二十三通——鴻池幸武・武智鉄二関係資料から——」『演劇研究』第三十五号（平成二十三年三月、演劇博物館）

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田キャンパス5号館、6号館

TEL 03-5286-1829

ホームページ <http://www.waseda.jp/enpaku/index.html>

交通機関

東京メトロ東西線「早稲田」駅下車、徒歩7分

都電荒川線「早稲田」駅下車、徒歩5分

入館料 無料

（企画展によっては有料となる場合もございます）

・休館日 ホームページの「開館日カレンダー」をご覧ください

・開館時間 月、水、木、土、日曜 午前10時～午後5時

火、金曜 午前10時～午後7時

— MEMO —

2013年度後期の企画展

「豊竹山城少掾展」

「新耽奇会展」

「寺山修司展（仮称）」

「益田太郎冠者と大正文化展」

12月10日（火）～2014年2月5日（水）

「六世中村歌右衛門展」2014年3月25日（火）～4月25日（金）

書評・紹介一覧 4～6月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
岡倉天心の比較文化史的研究	(評)(紹)『日本歴史』第779号(岡本佳子)	京舞井上流の誕生
天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史	(評)(紹)『日本歴史』第780号(石原比呂)	(評)「毎日新聞」(朝刊)6/9(渡辺保) (紹)「伝統文化新聞」5/11
近代日本高等教育体制の黎明	(評)『日本史研究』第609号(吉川卓治)	中世の契約社会と文書
戦国大名権力構造の研究	(評)『洛北史学』第15号(川口成人) (評)『日本史研究』第609号(久保健一郎) (評)『史学雑誌』第122編第4号(渡辺勝巳)	(紹)「寺門興隆」第175号 平安貴族社会の秩序と昇進 (評)『古代文化』第65巻1号(樋口健太郎)
訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀	(紹)『藝林』第62巻第1号(大平和典)	地域社会から見る帝国日本と植民地 (紹)『KOREA TODAY』第442号
人生の歩み業績録 レース-ゲスタエ	(紹)「同志社タイムス」5/15	復活!不味公大圓祭 (紹)「茶華道ニュース」5/15
正倉院宝物に学ぶ 2	(紹)『日本歴史』第780号	宗達伊勢物語図色紙 (紹)『月刊美術』第452号
老舗に学ぶ京の衣食住	(紹)『月刊京都』第743号 (紹)「京都新聞」(朝刊) (紹)『サンデー毎日』5/19(堀和世)	日本の食の近未来 (記)「日本農業新聞」4/6 朝鮮独立運動と東アジア 1910-1925 (紹)『KOREA TODAY』第443号 講座日本茶の湯全史 第1巻中世 (紹)「茶の湯文化学会会報」第77号

4月から6月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
地域社会から見る帝国日本と植民地	松田利彦・陳延媛編	1682-6 C3021	14,490	4
朝鮮独立運動と東アジア 1910-1925	小野容照著	1680-2 C3022	7,875	4
復活！不味公大圓祭 小林一茶が愛した大名茶人・松平不味	逸翁美術館編	1685-7 C1076	1,050	4
高木仙右衛門に関する研究(2刷)	高木慶子著	1684-0 C3021	2,100	4
近代の「美術」と茶の湯 言葉と人とモノ	依田徹著	1693-2 C3070	6,720	6

4月から6月にかけて刊行した継続図書

シ リ ーズ 名	配本 回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
金鯢叢書	39	39		1686-4 C3370	9,450	4
花園院宸記	22	31・33		1691-8 C3321	399,000	5
増補・改訂 西村茂樹全集		12	漢詩・書簡・語彙索引 他	1613-0 C3312	17,850	5
徳川美術館論集 尾陽	9	9		1692-5 C1370	3,150	5
龍谷大学善本叢書	31	31	中世歌書集	1688-8 C3391	13,965	5
大手前大学比較文化研究叢書	9	9	一九三〇年代東アジアの文化交流	1687-1 C3090	2,940	5
高野山正智院経蔵史料集成	4	4・5	高野山正智院連歌資料集成(全2冊)	1690-1 C3091	21,000	5
講座 日本茶の湯全史	1	1	中世	1696-3 C1076	2,625	6
講座 日本茶の湯全史	2	3	近代	1698-7 C1076	2,625	6
新島襄を語る		別巻3	八重の桜・襄の梅	1699-4 C1016	1,995	6

(表示価格は税5%込)

▼新刊書を刊行して、一定期間後、書店で売れ残ったものが小社に返品されてきます。その後、再出荷のために、改装作業を行います。商品毎に改装作業の頻度が異なります。刊期が新しいものほど、頻繁に改装作業を行うのはあたり前ですが、なかには古い本でも根強い人気があるのか、頻繁に改装を行い、その差はなにかと疑問を感じることがあります。類書がないもの、様々な研究領域にまたがるものなど、ある程度の理由はわかるのですが・・・最近でも、今年の2月に出した新刊書の残部が少なくなり、もう少し発行部数を増やせばと後悔をしております。そのためには最近の世相や、学界での流行などを敏感に察知しなければならぬと、日々勉強の必要を感じております。(一)

左記書店にて歴史書懇話会ミニフェアを開催中です。

- ・TENDO 八文字屋 (山形県天童市)
- ・紀伊國屋書店新潟店 (新潟県新潟市)
- ・今井書店グループセンター店 (島根県松江市)
- ・ブックデポ書楽 (埼玉県さいたま市)
- ・芳林堂書店高田馬場店 (東京都新宿区)

▼ラディカルという、急進的・過激など、一般にあまりいい意味には使われません。最近「フリーラジカル」もあります……。

熊倉先生のご著書を読んだり、お話しをお聞きするといつも、このラディカルの源義を思わずにはいられます。つまり「根源的」複雑に絡まったものごとの根っこを、鮮やかな手ざわで泥を落としてすっきり示してくれる。今回もそんな胸躍る体験でした。(h)

▼「御堂関白記」世界記憶遺産登録のニュースを聞くにつけ、道長が私のようにずぼらでなくてよかったと思います。直筆だろうと三日で終わっていたら目も当てられません。(M)

▼先日、あるお寺で、雨宿りをした。そのお堂には国宝の大きな阿弥陀如来像(平安後期作)があり、雨があがるまでの小一時間、仏像と向き合った。思いがけずゆつくりと静かに拝観できた。恵みの雨に感謝。(大)

▼先日「歴史秘話ヒストリア」を見ていたところ雑賀孫一の祭りに近年特に若い女性の参加者が増えているとか。消費者側から供給側に回った今年、あやかりたいなど昨年よりもよこしまな目で武将ブームを見えています。(m)

▼表紙図版「近世別子銅山の採掘現場」(別子銅山絵巻)部分、住友史料館蔵)／「住友の歴史」より

定期購読のご案内

『鴨東通信』は年4回(4・7・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうふうしん

鴨東通信 四季報 No.90

2013(平成25)年7月25日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

岩倉具視関係史料

佐々木克・藤井讓治
三澤 純・谷川 穰 編

〔全2巻〕

『岩倉公実記』の編纂にあたり利用された史料の最も主要な部分で、原文書を多く含み、未刊行書簡や書類も多い。維新史の定説に変更を迫る新出史料を活字化。

◎憲政資料室所蔵文書・対岳文庫所蔵文書・内閣文庫所蔵文書に次ぐ、第四の岩倉具視関係文書群（平成25年重要文化財に指定）

◎『岩倉公実記』編纂時に利用されたものの最も主要な部分で、その後大阪の質商に売却されたものと思われ、現在は海の見える杜美術館（広島県廿日市市）所蔵

◎一七二〇点の文書が二七三巻に成巻されている（ごく一部は未成巻）

◎東京寛都のいきさつを示す史料や、閣議の議案や決議の過程がわかる史料など、これまでに他の史料集などで紹介されていない未刊行書簡や書類が多数

【1月刊行】

▼A5判・総一一〇八頁／定価二五、二〇〇円

—— 史料の現物をご覧ください！ ——

没後130年記念 重要文化財指定記念展

いま歴史が書きかえられる

『岩倉具視関係史料』の精華

— 岩倉具視と明治日本を創業した元勳たち —

前期：7月20日（土）－9月1日（日）

後期：9月7日（土）－10月14日（月・祝）

海の見える杜
美術館 learn from nature and
pursue art & culture

〔アクセス情報〕 JR山陽本線「宮島口駅」または広島電鉄「広島宮島口駅」からタクシー約10分、
または山陽自動車道「大野IC」から車約10分 TEL 0829-56-3221 URL <http://www.umam.jp>

増補 改訂 西村茂樹全集

〔全12巻・完結〕
日本弘道会編／古川哲史監修

本全集では、西村の学問的な業績を中心に構成し、これまで未発表の論説や『日本道德論』の初版本など思想的にも貴重な著書が初めて公刊される。道徳学、哲学、論理学、社会学など、西村思想の真髄に迫る。



待望の完結!!

第1巻	著作1	A5判・七七六頁／定価一七、八五〇円
第2巻	著作2	A5判・七八四頁／定価一七、八五〇円
第3巻	著作3	A5判・八三六頁／定価一九、四二五円
第4巻	著作4	A5判・七六二頁／定価一七、八五〇円
第5巻	著作5・訳述書1	A5判・七九八頁／定価一八、九〇〇円
第6巻	訳述書2	A5判・七九四頁／定価一八、九〇〇円
第7巻	訳述書3	A5判・九〇八頁／定価一九、九五〇円
第8巻	訳述書4	A5判・八一八頁／定価一八、九〇〇円
第9巻	訳述書5・日記	A5判・八〇二頁／定価一八、九〇〇円
第10巻	論説1	A5判・七四〇頁／定価一七、三二五円
第11巻	論説2・訳述書6・他	A5判・七九〇頁／定価一八、九〇〇円
第12巻	漢詩・書簡・語彙索引・他	A5判・八〇四頁／定価一七、八五〇円

全12巻 揃定価二二二、六〇〇円

〔5月完結〕

八重の桜・襄の梅

新島襄を語る 別巻(二)
本井康博(同志社大学元教授) 著

NHK大河ドラマの主人公、新島八重。本書は、ドラマの後半部分、同志社・京都時代の時代考証を依頼された著者独自の切り口による、八重ゆかりの京都スポットの探索や、家族にまつわる謎、子孫たちや周辺の人々を紹介。



〔7月刊行〕

▼四六判・三一四頁／定価一、九九五円

日本の元氣印・新島八重

本井康博著

新島襄を語る 別巻(一)

戊辰戦争の鶴ヶ城に籠城し、京都最初のクリスチャンになり、「悪妻」と非難されてもひるまず生きた、八重の人生を話し言葉で紹介。

▼四六判・二四六頁／定価一、九九五円

八重さん、お乗りになりますか

本井康博著

新島襄を語る 別巻(二)

京都で最初のクリスチャンとなった新島八重。彼女の内面(信仰性)は果たして?八重の肉親関係など、敬遠されがちな「秘話」を語る。

▼四六判・三三四頁／定価一、九九五円

増補改訂 新島八重と夫、襄

早川廣中・本井康博共著

激動の時代を明るく生き抜いた八重の魅力を、わかりやすく紹介するはじめての一冊。資料に山本覚馬『管見』の翻刻を収録。

▼四六判・二二二頁／定価一、二六〇円

近代日本の歴史都市

高木博志編

古都と城下町

「古都」京都・奈良、「加賀百万石」の金沢、伊達政宗の仙台など、都市は実にさまざまな歴史性をまとうている。しかしそれらは、近代化の過程で発見され、選び取られたイメージであった。本書は「都市の歴史性」をキーワードに、分野を超えた研究者たちが参加した京都大学人文科学研究所・共同研究「近代古都研究」班の成果。

I 古都—京都・奈良・伊勢

修学旅行と奈良・京都・伊勢（高木博志） 郡区町村編制法と京都（小林文広） 創建神社の造営と近代京都（清水重敦） 一八九三年オーストリア皇族の来京（高久嶺之介） 明治期洛外の朝廷由緒と古都（谷川穂） 幸野棟嶺《秋日田家図》について（高階絵里加） 橋梁デザインに見る風致に対する二つの認識（中川理） 京都の風致地区指定過程に重層する意図とその主体（中嶋節子） 歴史を表象する空間としての京都御所・御苑（河西秀哉） 権門寺社の歴史と奈良町の歴史との間（幡鎌一弘） 平城神宮創建計画と奈良（黒岩康博）「神都物語」（ジョン・ブリン）

II 城下町—金沢・仙台・尼崎・岡山・三都

「城下町金沢」の記憶（本康宏史） 誰が藩祖伊達政宗を祀るのか（佐藤雅也） 武士と武家地の行方（岩城卓二） 帝国の風景序説（小野芳朗） 高等学校校制度と地方都市（田中智子） 近代「三都」考（丸山宏）

【8月刊行予定】

▼A5判・五七〇頁 定価八、一九〇円

近代京都研究

丸山宏・伊従勉・高木博志編

京都という都市をどのように相対化できるのか、普遍性と特殊性を射程に入れ、分野を超えた研究者達が参加した京都大学人文科学研究所共同研究の成果。

みやこの近代

丸山宏・伊従勉・高木博志編

歴史都市・京都は、近現代に大きく変わったまちであった。京都の根本問題を見通す試みの85篇。2年にわたり「京都新聞」に連載されたものを再構成。

▼A5判・二六八頁／定価二、七三〇円

北垣国道日記「塵海」

塵海研究会編

京都府知事・北海道庁長官などを歴任した明治期の地方官、北垣国道の日記を翻刻。

▼A5判・六五二頁／定価一〇、二九〇円

文人世界の「光芒」と古都奈良

大和の生き字引・水木要太郎

久留島浩・高木博志・高橋一樹編

近代奈良の水木コレクションを分析。日本史学・考古学等を横断する一書。

▼A5判・五〇八頁／定価八、一九〇円

歴史のなかの天皇陵

高木博志・山田邦和編

近代までの陵墓の歴史を易しく説く。京都アスニーでの公開講演に、コラム・座談会を加える。

▼A5判・三四〇頁／定価二、六二五円

中華民国の誕生と

大正初期の日本人

曾田三郎 (広島大学名誉教授) 著

「中華民国」の誕生は同時代の日本人に

大きな衝撃を与えた――

中国・日本双方の報道を通して大正初期の日本を見てゆくと、当時の日本・中国間における緊密な関係性がみえてくる。大正初期、日本の国会では中国のあり方・対中国政策が盛んに議論され、その如何が世論を動かした。臨時約法を始めとする中華民国誕生を取り巻く諸問題を通して、大正初期の日本人を捉え直す。

前著『立憲国家中国への始動』からさらに視野をひろげ、中華民国の誕生における日本と中国の関わりを紐解く。

序 論

第1章 中華民国臨時約法の制定と日本人法学者

第2章 中華民国臨時約法公布後の中国政治と日本人

第3章 中華民国約法期の袁世凱政権と日本人

第4章 中国の帝制復活をめぐる日本の政策と世論

第5章 中国の参戦問題と日本の世論

第6章 南北問題をめぐる日本の政策と中国の新聞報道

第7章 中国の南北問題をめぐる日本のジャーナリズムと学者たち

結 論



【7月刊行】
▼A5判・三三八頁
定価六、八二五円

立憲国家中国への始動

曾田三郎著

明治憲政と近代中国

従来の単線・単純な辛亥革命史研究の枠組みを打開すべく、立憲国家中国の形成という観点から叙述する中国近代史。

▼A5判・四〇〇頁／定価八、四〇〇円

青島の都市形成史 二八九七―一九四五

鑿玉鑿著

市場経済の形成と展開

青島がドイツ・日本との間に持った経済関係や、その関係が築かれた歴史的要因、青島の経済発展の過程や特徴など、青島が全中国へ与えた影響を解明。

▼A5判・三六四頁／定価七、一四〇円

日中戦争についての歴史的考察

明石岩雄著

日中戦争の全面化は、太平洋戦争への決定的転換点であった。日中戦争の原点について歴史学から考察する。

▼A5判・三五一頁／定価五、七七五円

日中戦争から世界戦争へ

永井和著

華北に利権を求める日本。イギリス・アメリカ・ソ連を相手にしてどのような対応をしたのか。日本が世界戦争への道を歩んでゆく姿を明らかにする一書。

▼A5判・五一六頁／定価七、九八〇円

古井喜実と中国

鹿雪瑩著

これまで十分な研究がなされてこなかった古井喜実を中心として、自民党内親中派による国交正常化への軌跡、交渉の裏側を体系的に検証。

日中国交正常化への道

▼A5判・三五六頁／定価三、九九〇円

地域社会から見る 帝国日本と植民地

朝鮮・台湾・満洲
松田利彦・陳延媛 編

〔4月刊行〕

▼A5判・八五二頁／定価一四、四九〇円

「支配される側」の視点と「帝国史」という視点——、異なるレベルの問題に有機的関係を見いだすため、国内外の朝鮮史・台湾史研究者が多彩な問題関心を持ち寄り植民地期の地域社会像を浮かび上げらせる。国際日本文化研究センター共同研究の成果。

内 容

I 研究の現状

植民地支配と地域社会

植民地から帝国史研究の可能性を再考する

松田利彦

陳 延媛

II 地域社会団体

朝鮮における帝国在郷軍人会

植民地期朝鮮における消防組について

通信政策による農村支配の一形態

植民地女性と「国民化」の問題

庵 途 由 香

松田利彦

福井 謙

宮崎聖子

III 宗教・慣習と社会教化

朝鮮総督府の「社会教育」と「地方改良」

植民地朝鮮の宗教運動と「中堅人物」

咸鏡北道における思想浄化工作と郷約・自衛団

IV 慣習と法の「近代化」

植民地台湾社会における法の植民地近代性

永島広紀

青野正明

水野直樹

陳 宛 好

日本の植民地支配と管刑
植民地朝鮮の民間鉱業の地域動向と「鉱業警察」の設置
黄欣・台南の「固園主人」
一九一〇年代台湾社会支配像の再検討
植民地で帝国を生きぬく
南朝鮮鉄道工事と土地収用令
沖繩出身者の台北師範学校における台湾教育経験と
沖繩の「戦後」復興への取り組み

V 知識人・有力者・エリート

VI 都市と衛生・娯楽

開港期釜山における朝鮮牛の輸出と「輸出牛検査所」の設置
一九一〇年代植民地朝鮮における衛生行政と地域社会
植民地台湾の大相撲興行と「国技」相撲
日中戦争期、満洲都市の住宅問題と保健・衛生行政

金 貞 蘭

李 炯 植

胎 中 千 鶴

田 中 隆 一

VII 戦時体制下の地域社会

戦時期朝鮮における「慰安婦」動員の「流言」「造言」をめぐる

植民地期朝鮮の「国語普及運動」の展開と朝鮮女性の対応

戦時末期朝鮮巨面の機能と朝鮮人民衆との乖離について

藤 永 壯

崔 眞 善

樋口雄一

李 鐘 暎

長 沢 一 恵

春 山 明 哲

野 口 真 広

陳 延 媛

広 瀬 貞 三

大 浜 郁 子

朝鮮独立運動と

東アジア

1910
—
1925

小野容照著

朝鮮独立運動はいかなる国際的要因によって展開していたのか、同時代の日本、中国、台湾の社会運動や民族運動との間にはどのような相互作用があったのか。

一九一九年の三・一運動以前の在朝鮮人留学生の組織活動、出版活動、独立運動の展開過程を追い、彼らが三・一運動後に社会主義勢力を形成していった過程を、その国際的要因と東アジア各国の運動との関連性に着目して論じる。



第一章 在日朝鮮人留学生の民族運動の胎動―「韓国併合」直後
第二章 在日朝鮮人留学生の出版活動
―朝鮮人留学生、朝鮮民族運動と日本人実業家

第三章 在日朝鮮人留学生の独立運動
―中国人・台湾人留学生と朝鮮人留学生

第四章 三・一運動後の朝鮮における社会と思想の変動

第五章 東アジア共産主義運動と朝鮮

第六章 日本における朝鮮人社会主義運動の発生と展開
―上海派高麗共産党国内支部の誕生
―北風派共産主義グループの形成過程

おの・やすてる：一九八二年横浜生。学習院大学経済学部卒。高麗大学大学院韓国史学科修士課程修了。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。現在、京都大学人文科学研究所助教。

【4月刊行】 ▼A5判・四二四頁／定価七、八七五円

植民地朝鮮の

日常を問う

第2回佛敎大学・東國大学校共同研究

佛敎大学国際学術研究叢書③

佛敎大学と韓国・東國大学校との3年間
にわたる学術交流の成果。植民地下における日常生活の様々な事象、日韓の歴史認識のズレを検討するための4編。

日帝の韓国併呑に対する韓国民の認識と対応

韓哲昊（東國大学校教授）

韓国併合前後の都市形成と民衆―港町群山の貿易・生産・生活

原田敬一（佛敎大学教授）

日帝強占期における「古都・慶州」の形成と古跡観光

金信在（東國大学校教授）

戦時期大邱の朝鮮人女子学生の学校生活―1937年の日記から

太田修（同志社大学教授）

▼A5判・三〇六頁／定価二、九四〇円



韓哲昊
原田敬一
金信在
太田修 著

朝鮮近代史を歩く

太田修著

京都からソウルへ

佛敎大学鷹陵文化叢書②0

朝鮮半島とそれにつながる人々にとって植民地支配と戦争の歴史はどのようなものであり、どのように記憶されているのか……。歴史と縁のある場所を訪れ、風景に触れ、人に出会ったなかから生まれた一書。

▼四六判・二七〇頁／定価一、九九五円

近代の「美術」と茶の湯

言葉と人とモノ

依田徹著

〔7月刊行〕

明治維新で価値を落とした茶道具は、どのようにして美術作品として再評価されるようになったのか？ 千利休と岡倉天心に注目し、近代美術史の視点から、明治以降の茶道具の評価を捉え直す。美術作品と茶道具の境界線を問う、革新の一書。

＆ 内容目次

- 第1部 茶道具評価の変容
- 第1章 日本美術史における茶の湯
- 第2章 文化財指定と茶道具―「美術」と趣味世界の境界―
- 第2部 茶の湯の文化価値の創出
- 第3章 明治期の文化論と茶の湯―西洋文化と東洋文化の相克―
- 第4章 「茶の湯」の成立と構造―岡倉覚三の美術論との関係から―
- 第3部 理論整備と作家制作
- 第5章 「美術」と「茶の湯」の仲立ち
- 第6章 「美術」作家による茶道具制作―大正期の板谷波山と香取秀真―
- 第4部 茶道具の「美術作品」化
- 第7章 近代の千家道具―千家と楽焼・永楽焼―
- 第8章 茶碗イメージの変遷―《不二山》《卯花墙》《大黒》―
- 第5部 「芸術家」利休の誕生
- 第9章 日本美術史における茶入―小堀遠州・松花堂昭乗から千利休へ―
- 第10章 「茶の本」の影響―利休再生と美術論―
- 第11章 戦後の茶道具論―定式化と懐疑―
- (付表) 総合年表・茶道具文化財指定年表

よだとおる：一九七七年山梨県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科芸術学専攻修了。博士（美術）。元さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。

▼A5判・三三二頁／定価六、七二〇円

京都 伝統工芸の近代

並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代編

「海外との交流」「伝統と革新」「工芸と絵画」「伝統工芸の場の視点から、様々なトピックスや人物にまつわるエピソードを取り上げ概観する。」

▼A5判・三〇〇頁／定価二、六二五円

岡倉天心の比較文化史的研究

清水恵美子著

ボストンでの活動に焦点をあてる。著者がアメリカで行った文献資料調査による新出資料なども駆使し、複眼的な視座からアプローチ。

（二〇二二年 度芸術選奨文部科学大臣新人賞 受賞）

▼A5判・五四八頁／定価一、二三五円

動物・植物写真と日本近代絵画

中川馨著

戦前日本における動物・植物写真や、それら写真集の歴史にスポットをあてて概説。また「動物・植物写真集」が、美術資料として担った役割を解明。

▼A5判・二五六頁／定価五、二五〇円

近代日本における書への眼差し

高橋利郎著

毛筆の文字資料が、近代に「書」として位置付けられていく過程を、書道史に関する出版、宝物調査や展覧会の列品、また文化財関連の法令から探る。

▼A5判・三〇四頁／定価五、〇四〇円

原本『古画備考』のネットワーク

古画備考研究会編

東京藝術大学附属図書館に所蔵される朝岡興頼自筆『古画備考』を軸に、古画備考研究会が取り組んできた共同研究の成果。江戸時代後期に繰り広げられていた、『古画備考』を中心とした古画研究ネットワークの実態や、近代における『古画備考』の受容の様相を検討。日本美術史研究の必携書。

▼A5判・四九八頁／定価九、六六〇円

講座 日本茶の湯全史

全3巻

茶の湯文化学会創立20周年記念出版

成立から近代まで 初の茶の湯通史



◎編集委員会◎

代表 熊倉 功夫 (静岡文化芸術大学学長)

影山 純夫 (神戸大学名誉教授)

竹内 順一 (永青文庫館長)

田中 秀隆 (大日本茶道学会副会長)

谷端 昭夫 (湯木美術館学芸部参与)

中村 修也 (文教大学教育学部教授)

中村 利則 (京都造形芸術大学教授)

美濃部 仁 (明治大学国際日本学部教授)

▼四六判・各巻 平均三三〇頁

第一巻 中世 [6月刊行] 定価 二、六二五円

第二巻 近世 [今秋刊行予定] 定価 二、六二五円

第三巻 近代 [7月刊行] 定価 二、六二五円

近年、茶の湯の歴史的な研究は、著しい展開とともに、テーマは多岐にわたり詳細をきわめている。

本講座は、日本文化史の中に位置づけられた茶の湯の展開を、茶の湯文化学会が総力をあげ、最新の研究成果をふまえて通覧する。

さらに深く茶の湯研究を志す人にとってのハンドブック的な要素ももたせる。

◎本講座の特長◎

・近代までを見通した初めての茶の湯通史

・流派の歴史でもなく、歴史のなかの「茶の湯」や建築史のなかの「茶の湯」など、単に従来の学問からみた茶の湯ではなく、豊穡な茶の湯世界そのものに深く入り込んだ観点から描く「茶の湯文化学」

・各分野の気鋭の研究者30名が、最新の研究成果をもとに茶の湯の世界ととりくみ、日本文化の核心ともいえるその果てのない深淵を広く世に示す

・各巻の構成

第Ⅰ部 熊倉功夫編集代表による概論

第Ⅱ部 時代を輪切りにして各時代の概要を論じる

本論6本

第Ⅲ部 茶の湯の重要な要素を通史として見渡す

特論3、4本

第Ⅳ部

各時代の茶の湯を知り、研究するため、

研究史・最新の研究状況・参考文献を解説

「研究の手引き」「参考文献リスト」

第1巻 中世〔内容目次〕

刊行によせて

Ⅰ 概説：茶の湯の成立
(熊倉功夫)

Ⅱ 平安・鎌倉の喫茶文化
(橋本素子)
会所の茶の湯 (影山純夫)
珠光から紹鴎へ (谷 晃)
茶会記から何を讀み取るか
(竹内順一)
千利休の生涯 (中村修也)
利休の茶の湯 (谷端昭夫)

Ⅲ 中国喫茶史 (高橋忠彦)
日本茶業史 (寺田孝重)
茶の民俗 (中村羊一郎)

Ⅳ 中世茶の湯研究の手引き
(中村修也)

参考文献

第2巻 近世〔予定内容目次〕

Ⅰ 概説：近世の茶の湯
(熊倉功夫)

Ⅱ 利休七哲 (八尾嘉男)
千宗旦と三千家の成立
(原田茂弘)
遠州と石州 (中村利則)
元禄時代の茶の湯
(木塚久仁子)
千家茶の湯の広がり
(堀内宗完)
茶の湯の地域的展開
(山田哲也)

Ⅲ 煎茶の理念と表現
(佃 一輝)
茶陶 (赤沼多佳)
茶の湯の名物記 (矢野 環)
茶室論 (日向 進)

Ⅳ 近世茶の湯研究の手引き
(谷端昭夫)

参考文献

第3巻 近代〔内容目次〕

Ⅰ 概説：近代の茶の湯
(熊倉功夫)

Ⅱ 井伊直弼と幕末維新の茶
(谷村玲子)
外から見た茶の湯
(田中秀隆)
近代茶家の復活
(筒井紘一)
近代数寄者の茶と数寄空間
(矢ヶ崎善太郎)
女性の社会進出とお茶
(大屋幸恵)

Ⅲ 茶の文芸 (石塚 修)
茶の思想 (美濃部仁)
茶の科学 (小泊重洋)

Ⅳ 座談会：茶の湯研究の
課題と展望 (編集委員)
近代茶の湯研究の手引き
(田中秀隆)

参考文献

野村得庵の文化遺産

野村美術館学芸部編

野村證券を中核とする野村グループの創始者・得庵野村徳七は、一代で野村財閥を築き上げた大実業家であると同時に、茶の湯・能楽にも全身全霊で打ち込んだ偉大な数寄者であった。

本書は、野村美術館設立30周年記念事業として、野村得庵の文化活動に焦点を当て、各分野の第一人者が論文集の形でまとめる伝記。

『野村得庵』全3巻以降新たに発見された史料や最新の研究動向をふまえ、新たな得庵像を提示する。

カラー口絵16頁
ごあいさつ
序文

得庵と碧雲荘（中村昌生）
得庵の古画蒐集（河野元昭）

得庵の能楽再考——『野村得庵』以後の知見を中心に——（天野文雄）
得庵の茶の湯再考（谷見）

得庵の建築（矢ヶ崎善太郎）
得庵蒐集の美術工芸品について（守屋雅史）

得庵と煎茶——碧雲荘内「北泉居」煎茶飾記を中心に——（松阪富美子）
『翻刻』野村得庵筆藏帳『文房具・煎茶器』（松阪富美子）

得庵と近代画家（松尾敦子）
棲宜荘建築図面の復元（柚木憲二）

【8月刊行予定】▼A5判・四七〇頁／定価三、一五〇円



近代茶道の歴史社会学

田中秀隆著

近代国家の文化的アイデンティティの生成構造面から、茶道が日本の「伝統文化」として認知されるようになった過程を考察する。

▼A5判・四五四頁／定価六、八二五円

近代数寄者のネットワーク

齋藤康彦著

茶の湯を愛した実業家たち
従来顧みられなかった茶会記録である『茶会記』のデータ分析を通して政界・官界・実業界を横断するネットワークを描出する。

▼A5判・三〇八頁／定価四、二〇〇円

復活！不昧公大圓祭

逸翁美術館編

小林一三が愛した大名茶人・松平不昧
逸翁が最も敬愛した大名茶人、松平不昧を採り上げた特別展図録。昭和29年、阪急百貨店古美術街での「不昧公大圓祭」当時の出品作品を中心にカラーで収録。
▼A4判・八四頁／定価一、〇五〇円

茶会記をひもとく——

逸翁と茶会

逸翁美術館編

逸翁美術館での特別展覧会図録。小林一三と茶の湯の出会いや、近代数寄者としての歩みを、残された茶会記をひもとき、オールカラーで紹介していく。
▼A4判・九二頁／定価一、〇五〇円

茶の湯文化と小林一三

逸翁美術館編

逸翁美術館の特別展覧会図録。小林一三の世界を「茶道との出会い」「逸翁の茶懐石」「逸翁と茶友」「逸翁の茶道観」「逸翁の愛した茶道具」にそって紹介。
▼A4判・一四八頁／定価二、〇〇〇円

住友の歴史 上巻

朝尾直弘監修・住友史料館編集

〔8月刊行予定〕

近世初頭から銅の精錬を業とし、その後金融・貿易などをも手がけ、近代の財閥につながる豪商の一典型である住友の歴史をわかりやすく紹介。連綿と受け継がれる住友精神の源泉がここにある。

〔下巻は二〇一四年夏刊行予定〕

内 容

- 第1章 創業者の肖像
- 第2章 東アジアの銅貿易と住友
- 第3章 火と水と土石とのたたかい
- 第4章 鉱山都市と積出港市
- 第5章 銅貿易を支える仕組み
- 第6章 銅の生産と関連諸産業
- 第7章 住友の江戸進出



上：住友が完成させた南蛮吹（鼓銅図録・住友史料館蔵）
下：近世別子銅山の採掘現場（別子銅山絵巻・同上）



▼四六判・三〇〇頁／定価一、七八五円

住友史料叢書

〔既刊27冊・第5期刊行中〕

小葉田淳・朝尾直弘監修／住友史料館編集

1万数千点にのぼる近世鉱山関係史料のうち、重要で継続する記録類を中心に翻刻。各巻とも改題と索引を付す。

▼A5判・平均四〇〇頁／既刊揃定価二六一、九七五円
《最新第27回配本…銅座方要用控三 定価九、九七五円》

貨幣と鉱山

小葉田淳著

日本経済史研究の泰斗が中世から近世にいたる貨幣と鉱山に関する論考を集成。〔内容〕近世、銀・金の海外流出と銅貿易の動向／日本中近世の貨幣事情／領国武田氏の幣制と家康の幣制の確立 ほか全11編

▼A5判・三〇〇頁／定価八、一九〇円

日本銅鉱業史の研究

小葉田淳著

金銀山の史的的研究を集成した、『日本鉱山史の研究』（学士院賞）、『続日本鉱山史の研究』につづく本書には、足尾・面谷・別子など日本を代表する鉱山の個別の史的調査研究に加え、付篇として産銅に関する近世の銅貿易と鑄銭についての論稿を取めた。

▼A5判・八六八頁／定価一九、九五〇円

近世鉱山社会史の研究

荻慎一郎著

鉱山社会史研究の視点から、従来の研究で欠落していた支配・経営構造、技術受容と生産体制、労働組織、鉱山法や住民の社会生活などの実態を大葛金山・院内銀山などの一次史料を通して明かす先駆的な業績。第7回高知出版学術賞受賞。

▼A5判・六四〇頁／定価一三、四四〇円

日本産業技術史事典

日本産業技術史学会編

「日本の近代」の理解において不可欠でありながら、従来必ずしも系統的・組織的に実施されてこなかった日本の産業技術史研究を23の大項目に分け、関連項目を三四四の小項目としてとりあげ、日本の産業技術史を俯瞰する。

▼B5判・五五〇頁／定価二一、六〇〇円

幕末期の老中と情報

佐藤隆一著

【9月刊行予定】

水野忠精による風聞探索活動を中心に

水野忠精を題材とした老中の情報収集を軸に、同時代の他の事例も交えて、幕末期の老中による政治情報収集の実態とその情報内容、さらにはこれらの扱われ方を実証的に分析することで、基本的な老中の情報収集ルートの枠組を明らかにする。悪戦苦闘と挫折をくり返しながらも国政を支え続け、結果的には敗者となった水野忠精が幕閣の政治活動にも、明治新政府樹立への踏み台としての役割を認め、一定の歴史的評価を与える。

内容

序 章 言葉としての「情報」と「風聞」「風説」

第1章 老中と情報に関わる諸問題

第2章 島津久光卒兵上京・江戸出府に関わる情報収集

第3章 將軍家茂上洛をめぐる情報収集

第4章 攘夷・鎖港問題をめぐる情報収集

第5章 元治の庶政委任と老中の往復書翰

第6章 禁門の変に関わる情報収集

第7章 長州藩・天狗党・外交問題に直面する幕閣と情報

第8章 水野忠精老中罷免をめぐる状況

第9章 彦根・土浦両藩とオランダ風説書

さとう・りゅういち……一九五六年東京都生。青山学院大学大学院

文学研究科史学専攻博士課程単位取得済退学。現在、青山学院高等部教諭。

▼A5判・五〇〇頁／定価九、九七五円

明治維新期の政治文化

佐々木克編

京都大学人文科学研究所の共同研究「明治維新期の社会と情報」の成果。政治文化」という視点から、明治維新期の諸問題にアプローチを試みた一書。

▼A5判・三九〇頁／定価五、六七〇円

一八世紀日本の

笠谷和比古編

文化状況と国際環境

日本の18世紀の文化的状況は東アジア、西洋世界をふくめたグローバルな環境下で、いかに影響を受けつつ独自に展開したか。多角的にアプローチする。

▼A5判・五八二頁／定価八、九二五円

幕藩制国家の成立と対外関係

加藤榮一著

思文閣史学叢書

幕藩権力がどのような国際的環境のもとに国家支配の枠組を形成したか。東インド会社との関係史を基軸に、国際社会の変革の過程の中に捉えなおす。

▼A5判・四八四頁／定価九、二四〇円

阿蘭陀宿海老屋の研究

〔全2冊〕

片桐一男著

オランダ商館長や通詞の定宿海老屋の史料から、「人」「物」「情報」の通過点であった阿蘭陀宿の目的・機能・史的意義を探る。村上家文書の翻刻も収録。

▼A5判・総八五〇頁／定価一七、八五〇円

岩倉使節団の比較文化史的研究

芳賀徹編

比較文化史的視点から岩倉使節団を論じた共同研究。編者をはじめ、日米英の8名が日米英仏伊における使節団を論じる。

▼A5判・三五八頁／定価六、八二五円

近世妙心寺建築の研究

平井俊行著

京都府教育庁文化財保護課の修理技術者として、妙心寺建築物の保存修理に携わるなかで積みかさねてきた研究をまとめた一書。

臨済宗妙心寺派本山の個々の建築について、本山や塔頭に残る中世・近世の古文書や棟札の解読、実測のみならず、それぞれの建造物の行事での利用状況まで分析し、近世妙心寺建築成立の意義を検討する。

予定目次

- 第1章 序章
- 第2章 妙心寺の沿革
- 第3章 序論
- 第4章 法堂―天正・明暦の2期の普請文書と臨済宗最大教団への道―
- 第5章 仏殿―文化・文政期における再建の目的とその結果―
- 第6章 山門―「山門圍」の意味と山門の活用―
- 第7章 大方丈―独立した本山施設と新行事の創造―
- 第8章 庫裏―利便性の追求と役僧の変化―
- 第9章 浴室―正面の意匠保全と施浴の仕組み―
- 第10章 結語

ひらい・としゆき：一九五九年東京都立。京都工芸繊維大学大学院修士課程修了。博士（工学）。京都府教育庁指導部文化財保護課建造物担当課長。

【8月刊行予定】 ▼B5判・四〇〇頁・定価九、九七五円

神仏習合の歴史と儀礼空間

嵯峨井建著

日本宗教史の基本位置にある神道と仏教との関わりを、祭祀・法会の空間である神社・寺院の儀礼空間を視點に論じ、神仏習合の実態を明らかにする。

▼A5判・四二八頁／定価九、〇三〇円

大工頭中井家建築指図集 中井家所蔵本

谷直樹編著

江戸幕府の京都大工頭を代々勤めてきた中井家に伝わる建築指図をまとめる。図版は五一七点を大判で収録し、解説を付した。

▼B4判・三六〇頁／定価一八、九〇〇円

京・近江・丹後大工の仕事 近世から近代へ

建部恭宣著

寺院造営における大工の仕事、町大工の構成と作事棟梁制度の変遷、幕末の藩士住居の図面と用材など、史料の精査に基づいて大工活動の実態と近代化への歩みを考察する。

▼A5判・二七〇頁／定価五、七七五円

近世京都の町・町家・町家大工

日向進著

近世における京都町家の形成と展開の過程を事例に、町家が住居形態として一定の類型を保持し、存続してきた背景としての建築的、技術的、社会的、都市的な要因を解明する。

▼A5判・三四〇頁／定価八、一九〇円

阪神・淡路大震災と歴史的建造物

加藤邦男編

大地震による建築物被害のうち歴史的建築物の被害状況を把握し、文化財建造物の将来にわたる保全、利活用における技術方策と環境の歴史的価値の問題を再検討する。

▼B5判・二八〇頁／定価八、一九〇円

渡辺保氏 (演劇評論家) 絶讃!!

毎日新聞 今週の本棚

(6月9日(日)付 書評欄)

「都をどり」に息づく

文化・風俗の歴史を活写する

(前略)

京舞井上流は、初代八千代から現五代目まで、日本舞踊のなかでも独特の表現を持つ一派である。しかしなぜこういう一派が生まれたかは、井上家に伝わる伝承以外あまり明確でなかった。岡田万里子はその伝承を膨大な史料によって検証し、客観的にその歴史を描いている。

(中略)

岡田万里子はこれらの事実を実証した。それが可能になったのは文化全体の流れをとらえる視点があったからである。その意味で本書は文化史であり風俗史として画期的である。多少専門的ではあるが、歴史のなかに浮かぶ人生や時代の風景はさながら小説や史伝を読むが如くいキイキとして、私は大いに想像力を刺激された。

京舞井上流の誕生

岡田万里子著

[3月刊行]

京都の花街祇園に伝承され、特色的な型や伝承作品が話題にされる京舞井上流、日本舞踊のなかでも一際異彩を放つこの流派は、どのように誕生したのか。本書は、近世から近代にいたる流派の歴史を検証し、伝承作品群の成立背景を考証する。堂上・花街文化、そして、能、人形浄瑠璃、歌舞伎といった他の芸能の影響を確認しつつ、その豊饒な母胎——近世後期京都における芸能的世界の解明に挑む。

内 容

第一部 井上流の歴史

序 章 先行研究とその問題点

第一章 初世井上八千代と創造の基盤

第二章 二世井上八千代と流派の形成

第三章 三世井上八千代と伝承の確立

第二部 井上流の舞踊

序 章 言説の誕生とその傾向

第一章 井上流と棋家の芸能

第二章 井上流と花街の芸能

第三章 井上流と能

第四章 井上流と人形浄瑠璃

第五章 井上流と歌舞伎



▼A5判・五五二頁／定価九、四五〇円

おかだまりこ：早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程（芸術学）修了。現在、ミシガン大学日本研究センター・トヨタ招聘教授、歴史学部講師。

——思文閣グループの逸品紹介——

美の縁

び

よすが



慶長六年（一六〇二）、徳川幕府によって東海道五十三次の宿場が定められると、日本橋を起点として一里塚の制度が設けられるなど街道の整備が進められ、東海道は五街道の中で最も発展を遂げました。慶安四年（一六五二）には幕府による測量調査が行われ、その結果に基づいて遠近道印が作成し、菱川師宣が絵図を施して完成したのがこの「東海道分間絵図」です。

「分間」とは縮尺を意味し、この図は「三分老町之積り」（一万二千分の一）で描かれています。江戸から京都までの道のりを五帖に収めた本図は、各宿場に問屋名や宿場間の里程が記され、街道筋には旅人、飛脚、大名行列などが行き交い

◆東海道分間絵図◆

とうかいどうぶんけんえす

ひしかわもろのぶ
菱川師宣

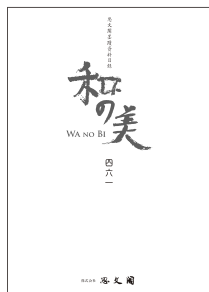
ます。富士山をはじめとした名所旧跡や、大井川、桑名七里の渡など難所の描写も表現豊かで、川の渡り方についての記述などもあります。また、方位盤による方角が要所で図示されるのも興味深い点です。

浮世絵や絵画など、東海道を題材にした作品は数多いですが、本作は師宣作の道中絵巻としての価値のみならず、測量調査に基づく縮尺や方角など科学的要素も取り入れた実用性を兼ね備えた地図としての評価も高く、江戸時代を代表する極めて貴重な道中図として、往時の旅の様子を今に伝えています。

（思文閣出版古書部・西原達也）

思文閣墨蹟資料目録

和の美

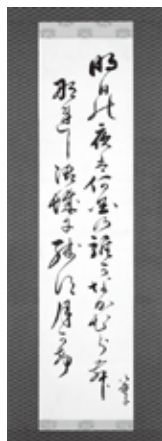


古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録



新島八重和歌幅 一幅

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵などから学術書全般に至るまで、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年4回程度発行）。
ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp

美術品を売る、買う。

「思文閣大交換会」が
いちばんの方法です。

思文閣大交換会は、年4回の大入れ会。
美術品を売りたい方、買いたい方双方に
ご満足いただいております。

詳細・お問い合わせは

思文閣京都本社

TEL (075)531-0001

mail info@shibunkaku.co.jp

畠山耕治展

KOJI HATAKEYAMA

平成25年 9/14(土)～23(月)

10:00-18:00 (会期中無休)

平成25年秋、ぎやらりい思文閣では、
畠山耕治による青銅の作品を展覧いたします。
皆様のお越しを心よりお待ちしております。

ぎやらりい思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町386
TEL(075)761-0001 gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/